

神の子イエス・キリストの福音の初め。(マルコ福音書1章1節)

マルコ福音書は「神の子イエス・キリストの福音の初め」と書き始めている。マルコ福音書の著者マルコは12弟子の筆頭ペトロの愛弟子(通訳者)ではないか。それは、使徒言行録12章12節に、「そうと分かるとペトロは、マルコと呼ばれていたヨハネの母マリアの家に行った」と書かれているヨハネ・マルコではないかと推測されるからである。

主イエスがゲツセマネで捕縛され、それを見た弟子たちは、自分が捕えられることを恐れ、蜘蛛の子を散らすように逃げ去った。その後、「一人の若者が、素肌に亜麻布をまとうてイエスに付いて来ていた。人々が捕えようとする、亜麻布を捨てて裸で逃げ去ってしまった(マルコ14:51~52)」と、奇妙な追加文が書かれている。この若者は、主の晩餐を行った二階の広間を提供したマリアという女性の息子ではないか。彼は、母が尊敬する主イエスに関心を持ち、ゲツセマネまでついて行った。主イエスが祈っている間、ペトロ、ヤコブ、ヨハネは寝込んでしまったが、彼は、主イエスが苦悩して祈る姿と言葉を、深い関心をもって見続けていた。逃げ遅れた彼は危うく捕らえられそうになったが、亜麻布を脱ぎ捨てて逃げ去った。彼が、主イエスのゲツセマネの祈りを伝えたのではないか。

そして、主の晩餐を行った二階の広間は、初代教会の集会所であったようだ。使徒言行録12章には、ペトロは捕えられたが、天使によって解き放たれた出来事を記している。解放されたペトロはすぐに、ヨハネ・マルコの母マリアの二階の広間の集会所に向かった。このヨハネ・マルコは、バルナバとサウロ(パウロ)の第一回の宣教旅行に同伴している。聖書の人物像に関しては、十分説明されていないので、想像が膨らむが、もし、ゲツセマネで亜麻布を脱ぎ捨てて逃げ去った若者がヨハネ・マルコであるならば、上記のような関係で、マルコ福音書の著者は彼ではないかと類推することができる。

いずれにしても、著者マルコは、主イエスの福音を多くの人に伝えたいという篤い思いを持って、誰よりも先に、マルコ福音書を書き始めた。時は、ローマ軍によって、エルサレムが陥落した70年頃である。続いて、80年代にマタイ、ルカ福音書が書かれている。マルコ、マタイ、ルカの三つの福音書は、人間の側から見た主イエスの生涯、十字架と復活を伝えているので、共観福音書と言われている。その共観福音書を解きほぐすと、イエスの語録(Q資料)があったことが推察される。共観福音書の著者たちは、イエスの語録と自分が持っていた独自資料から、それぞれ個性的な福音書を編纂した。これらの福音書によって主イエスの福音が伝えられたのであるから、福音書記者たちは、歴史上最も貢献したと評価されてよいのではないか。私たちの信仰は、彼らの著述に徹底的に負っている。

これらの福音書は主イエスの生涯、十字架と復活を伝える書物であるが、肉を持ったナザレのイエスの史実をそのまま伝えるものではない。彼らは、ナザレのイエスを主キリストと信じた。その信仰に基づいて、キリスト告白として福音書を書いたのである。従って、一般の古典を読むように、文献学的な分析によってのみ受け止めると、聖書のメッセージは伝わってこない。史的イエスを追求する学問が進み、そこで明らかになったイエス像は素晴らしいインパクトを与えるが、著者たちの信仰の目を通してのイエス伝であることを踏まえて、読むことが大事なことである。それは「霊的」な読み方と言っていい。史的イエスを求め、「霊的」なキリスト像を受け止めながら、福音書を読む。そのことによって、彼らの記述が、主イエスの福音を明確に伝えているかが、理解されてくる。

さて、「福音」は、ギリシア語で「エバンゲリオン」と言い、「喜びのおとずれ・グッド・ニュース」を意味する。ローマ帝国において、権力抗争によって皇帝はしばしば入れ替わったが、新皇帝が即位したことを、民衆に知らせるニュースを「福音」と言った。新皇帝の即位が民衆にとって、「喜びのおとずれ」であったかどうかは疑問であるが、初代教会は、時代の言葉を取り入れ、喜びのおとずれである主イエスの福音を伝えようとした。

マルコは「神の子イエス・キリストの福音」と書いている。ここには、イエスは「神の子であり、キリスト（救い主）である」と告白されている。彼は、神の子イエス・キリストが啓示してくださった「福音」を伝えよう書き始めた。

そして、福音の初めは、洗礼者ヨハネから起こっていると続けている。「預言者イザヤの書にこう書いてある。『見よ、私はあなたより先に使者を遣わす。彼はあなたの道を整える。』」「見よ、私はあなたより先に使者を遣わす。彼はあなたの道を整える」という言葉は、イザヤの言葉ではなく、預言者マラキの「私は使者を遣わす。彼は私の前に道を整える（マラキ 3:1）」からの言葉である。マラキは、主の日、即ち、キリストが来られる日の前に、キリストが歩まれる道を整える使者が遣わされると預言した。その使者がヨハネであり、彼は荒れ野で、『主の道を備えよ／その道筋をまっすぐにせよ』と叫ぶ。この言葉は、第二イザヤの「呼びかける声がする。荒れ野に主の道を備えよ。私たちの神のために／荒れた大路をまっすぐに通せ（イザヤ 40:3）」からの言葉である。イスラエルの民は、台頭してきたペルシアのキュロス王によって、バビロン捕囚から解かれ、エルサレムへの帰還が許された。第二イザヤは、神が先導するエルサレムへの帰還の大路をまっすぐに備えよと、喜びをもって叫んだ。マルコは、二人の預言者の言葉が実現した、キリストの前に遣わされた使者はヨハネであり、ヨハネは荒れ野で「主の道を備えよ」と叫んで、キリストの歩まれる道備えをしたと解き明かしている。

まずヨハネは、荒れ野に立った。ルカ福音書1章に、ヨハネは、エルサレム神殿に仕える、神の前に正しい祭司ザカリアとその妻エリサベトの間に、年老いてから生まれた独り子であると書かれている。夫婦はヨハネを神殿に仕える祭司にしようと、熱心な宗教教育をしたに違いない。ところが、ヨハネは、墮落した神殿からは神に対する真摯な信仰は生まれないと、神殿を捨て、荒れ野に立った。荒れ野は、出エジプトしたイスラエルの民が40年間、放浪した地で、彼らはここで、神の真実と恵みを知った。荒れ野は、イスラエル人にとって信仰の原点である。ヨハネが荒れ野に立ったということは、既成のエルサレム神殿での祭儀宗教や律法を民衆に説いたファリサイ派の硬直した宗教とは決別した、打ち捨てられた者に福音が説かれていくというメッセージが込められている。次にヨハネは、らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、預言者エリヤを彷彿とさせる様相で、ばったと野蜜を食べる禁欲的な生活の中から、罪の赦しを得させる悔い改めの洗礼を宣傳伝えた。今、ここで、初々しく心を神に向けよと宣教をした。その宣教に心を打たれ、民衆は続々とヨルダン川で洗礼を受けた。ヨハネの悔い改めの洗礼は全イスラエルを揺るがす大きな宗教覚醒運動となった。この神への覚醒が、キリストの歩まれる道備えとなったのである。

ヨハネは、「私よりも力のある方が、後から来られる。私は、かがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない。私は水であなたがたに洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになる」と宣傳伝えた。ヨハネが道備えをした後、神から救い主キリストが遣わされ、自然な水ではなく、神の聖霊によって洗礼が授けられる「神の時」が来る。その時の招来を告げるヨハネの洗礼運動が、福音の初めであったのである。